

広島大学（前期日程）小論文

解答例

題（タイトル）：自由意志の擁護

科学文化においては人間と動物、生体と機械の境界は侵食され曖昧模糊になったと資料二は指摘する。ある種の小鳥が言語をもつことが解明され言語使用能力は人間固有の特徴としての権威を失い、オルガノイド作成技術の発展によって自然と人工という生体と機械とを区分する特徴が曖昧になった。科学の発展を通じて、人間とそれ以外の境界は不明瞭になっていく。

しかし、私たちは人を襲ったクマを裁判にかけないし、友人から送られてきた文章が酷く気分を害した際に、それを対話型AIが生成したことを知ったとしても、友人に怒りを向けるだろう。これらを根拠として、科学文化から離れた場面では人間とそれ以外の区別が通用していると主張する。

科学文化を離れた場面で成立するこの区別は、自由意志の有無によって境界付けられると私は考える。人間は、他の行為を選択可能であり、自分の意志で自由に選択することができる自由意志をもつ。であるからこそ、他者に危害を加えた人間は法廷で法と行為に至った経緯、更生可能性を考慮して量刑が判断される。また他者の気分を害することの責任も、そうした行為を選択しないことも可能だからこそ問われる。一方で人間を襲うことが習慣になったクマは、それが可能な場面では人間を襲うだろうし、ましてやそれを悔い改めることは期待されない。そのような点で自由意志は人間が人間だけ

を特別に扱う根拠である。そして、自由意志は科学の問題というよりも哲学の問題とされてきた。

しかし、科学は自由意志をも射程に捉えつつあるようである。主観的な意識経験、特にアウェアネスに先立って無意識の精神事象が起こるといふ。その遅延によって、自発的に活動しようとする意図や願望に被験者自身が気づくより前に、脳は自発的なプロセスを無意識に起動する。資料三の指摘は、筆者が指摘するように自由意志の性質や個人の責任を考える際に深い影響を与える。私たちは完全に自由に意志を決定するわけではなく、主観的な経験内容を修正する無意識の脳プロセスの影響下で選択しているにすぎなくなるからだ。デカルトに代表されるように精神と物質は対立するものと捉えられ、物的世界から独立した精神をもつことが人間の本質だと見なされてきた。しかし、資料三に従うと、人間の判断は物質である脳で生じる意識的には選択できない無意識の事象の結果に他ならず、物的世界の因果に捕らえられる。それ故、物質と精神との二項対立を前提とした、機械論から自由な意志は想定しがたくなる。

しかし資料一の筆者が知覚風景の自己帰属について自他、主客の二分を超えた相互関係を主張しているように、自由意志に関しても精神と物質との二項対立を超えて捉えることができる。たとえ物質的な事象の結果であっても、選択の自由は、他の行為を選択可能である限りで存在するからである。

資料番号：一、二、三

広島大学（前期日程）小論文  
解答例

題（タイトル）：二元論を超えた問題解決の必要性

幼い子供は世界を分類しながら成長する。生まれたばかりの子供はまず自分と世界を切り分け、それがやがて自分と世界と母親に分類される。その後対立概念を理解し、空腹と満腹、大きいことと小さいことなどを分類できるようになる。さらに成長すると成功と失敗、善と悪、生と死のような概念も獲得していく。これが仏教のいう「分別」である。資料四のいう「自由に意味を創造できるもの」のなかには、成功と失敗、善と悪の概念も含まれるだろう。子供がどのように善悪を理解するかは、その子供がどのような人格を獲得したかによって左右される。

人格とは一人の人間が獲得していく「統一された自己」のようにとらえられがちだが、自己と他者の境界は本当に自明だといえるだろうか。資料二では人間と動物の境界、動物と機械との境界、物理的なるものと物理的ならざるものの境界のあいまいさが示された。だが同時に、あるものと別のものを区別するためには、互いに浸食しあう境界線を観察するしかない。自己のなかには、その人を形づくる数々の他者が存在する。そうであれば、「分別」とは人間が自分と周囲にあるものとの意味づけをするなかで生まれくるものだと考えることができる。

さてある程度の年齢になると、今度はその逆が起こり始める。一見違っているものが実は連続する一続きのものであったり、同一の

ものの一部分であったりすることがわかってくる。生と死の連続性はその筆頭であろう。細かく分割された世界は、成長過程で再統合されるのである。これが資料五で示された「不二法門」だ。「煩惱即菩提」という言葉は、日常生活のなかでは矛盾して聞こえる。煩惱と菩提は一般に、対立する二項のようにとらえられているからだ。だが死のない世界で生を認識することはできず、執着のない者に悟りは何の意味も持たない。二にして不二の考え方は、「分別」を前提としたその先にある。

では「不二法門」に入った先には何があるのだろうか。資料五によれば、それは「二つの相対立するものにとらわれない自由な境地」であるという。成長過程で分類した世界を「より高次の次元」から観るのが真の解脱だというのである。私は大学入学後に、まずは学問の世界でこれを実践したい。社会には単純な分類、二元論ではおさまらない問題が数多くある。対立する二つの立場のどちらかを支持すればいいだけの問題ではないこともたくさんある。そのなかには、連続する一続きのもののある部分しか見ていないために起こる対立、同一のもの的一部分しか見ていないために起こる対立もあるかもしれない。その視点を持って両者の「境界」とされる部分を観れば、その主張がどのような関係性、文脈から生まれたのか、どのような環境からその主張をするに至ったのか互いに理解しあえるかもしれない。現代社会の諸問題を考えるにあたってはこの視点を大事にしたい。

資料番号：二、四、五

題（タイトル）：身体的感覚はどのように心に影響されるか

ギアツは「人間は自らが生み出した意味の網の目の中で生きる動物である」とした（資料四）。この一節のポイントは、「自ら生み出した意味」というところにあるだろう。すなわち、同じ事物、同じ現象に対して、「私たち」皆が共通した意味を見出して当たり前ではないのである。特定の事物や現象に「私」がつける意味は、私以外の誰かがつける意味とは異なり得ると資料四は述べる。

たとえば、ここに「生煮えの野菜がごろごろと入っている、塩気の足りないスープ」があるなら、それは通常は「まずいスープ」である。ただし、そのスープは、「そのスープ」に関連する多くの意味をまといつつそこに在る。誰が作ったのか。その人はなぜそのスープを作ったのか。その人と私の関係性はどのようなものなのか。そのような「私」がこれまで生きてきた過程で他者や環境と結んできた様々なつながり、そこで見出してきた様々な意味が絡み合ったなかでこそ、「そのスープ」の意味が立ち上がってくるのだ。関係がこじれた家族から私に対して意図的に出されたものなら、それは「いやがらせ」であり、思わず吐き出してしまうほど「耐え難くまずいスープ」と感じられるかもしれない。一方で、それが血圧の高い老いた私を心配する孫が、私のために初めて作ってくれた料理なら、私は孫の「思いやり」を喜び、「おいしいスープ」と感じながら食べるかもしれない。これは味覚にも各個人独自の解釈の余地が

あることを示しているのではないだろうか。

それならば、そもそも「おいしい／まずい」という感覚にかかわる二項対立は成立し得るのか。「私」という人間がいて、その思考だけではなく感覚も「私」が生きてきた環境や人とのつながりによって規定されているのならば、「私」以外の誰かについても同様にその思考や感覚はその人なりのものである。したがって、絶対的においしいものやまずいものはないことになる。資料五では、そのような「分別」、そしてその間の「対立」を解釈しなおす視点が提示される。

ただし、そのような状況においては私たちが漠然と生物的本能や生得的反応に根差したものと捉えている「感覚」への理解が適切なものなのかという疑問が生じる。「主観的な意識経験」、アウエアネスについて、資料三はそれに先立って無意識の精神事象があらわれると指摘している。意識を伴う思考、たとえば上記のスープにどのような意味づけをするかにはこの無意識の精神活動が関与することになり、両者のタイムラグの間に通常なら「まずいスープ」を「耐え難くまずいスープ」、あるいは逆に「おいしいスープ」と感じる感覚イメージの修正が生じるのではないだろうか。そして、その修正に私たちは気づかない。一見対立するものは実のところ連続しており、それらを截然と分かつことはできないのではないか。

題（タイトル）：私たちはなぜ環境を保全すべきなのか

新型コロナウイルス感染症が蔓延した二〇二〇年春は、予定調和で理解可能な世界が反転し、不可解なものとなした経験だった。中学一年夏の西日本豪雨のときにも似た感覚があった。思春期の間に、二度も世界が崩壊する感覚を経験した私にとって、「だから環境保護が必要だ」という言葉は嘘くさく、それならば深刻なレベルで改変されつつある環境を保全すればよいのではないかと、大人たちの発言を冷めた気持ちで聞いてきた。

しかしこうした考え方は、資料四の、「自らが生み出した意味の網目の中で生きる動物」とする人間観によって変わった。資料四の考え方はとてもわかりやすい。たとえば満員電車の中で他者と触れ合うことは、愉快ではないが我慢の範疇におさまる。しかし、ガラガラの空いた電車の中で知らない他人が隣に座り身体を密着させてきた場合、どうしようもない不快感や恐怖感に苛まれ、多くの人はその場を立ち去るであろう。あるいは、面接会場で身の置き所なくコチコチに凝り固まった身体は緊張感と不可分にある一方で、家族といるときの緩い身体はリラックスした精神と、密かに恋愛感情を抱く相手と同じ空間を共有できたときのぎこちない身体はドキドキした感情と不可分ではない。空間と精神は二元論的に分離できず、「それぞれの意味と価値によって特色づけられた」場所に置かれた身体は、その都度内面世界を立ち上げる。つまり、その場がどのよ

うな性質のものであれ、自分と無関係のものとして対象化し、客観的・分析的に捉えることなどできない。環境と私とは、常に相互に作用し影響し合っている。

では、私は他者から規定される不安定な現象にすぎないのかというところではない。資料五では、「波の本性を離れて水なく、水の本性を離れて波はない」という比喩を用いているがこれはそのまま、私と環境の関係にあてはまる。私と環境は「不二の関係」にある。こうした不可分性は、私たちが「ある環境に適応し、そこでの事物の制御に習熟」することは「その環境に取り込まれる」ことであり、「環境を支配する」ことは「その環境によって浸透されること」であるとする資料一の考え方も接点を持つ。私たちが環境を支配できたと考えるとき、不二の関係は壊れる。私たちは自他、主観・客観の二分法を超えて、環境を身体化している。ここに、環境を保全しなければならぬ本質があるのでないか。

もし冒頭の大人達の発言に問題があるとすれば、居心地の悪い世界を、人間は一方的に改変できるという対象化し操作する感覚である。居心地が悪い世界を居心地良く改めるために、同時に私たちの在り方を変えなければならぬ。つまり、環境は、あくまでも私が私の本性を離れず環境の不二の関係を良好に保つことができる意味において、保全されるべきである。なぜなら環境は、今の私と不可分の合わせ鏡であるからだ。

資料番号……………資料一、資料四、資料五